

パネルディスカッション I 被害者の声に耳を傾ける：被害者の現状と望むこと

コーディネーター：大久保恵美子、井上尚美（NPO法人大阪被害者支援アドボカシーセンター運営委員）

（要旨）民間支援団体や関係機関や自治体による適宜適切な支援の提供は、被害者の方たちから直接声を聞き、学ぶことから始める必要がある。本年もパネルディスカッション I では、被害者ご遺族、ご家族をパネリストとして招き、ご自身の体験と支援に求めることを語っていただくこととした。

北口忠さん（広島県）は、当時高校生だった娘さんが自宅で刺殺され、事件は今も解決していない。「肉親との別れの死と、犯罪によって亡くした死は全く違うもので、何年経とうと死を受け入れることはできません。」「遺族は辛さ、悲しさが一生続くのに対し、逃げ回っている犯罪者は、時が来れば、私がやりましたと笑っても罪を問われません。これだけはどうしても許すことができません。時効撤廃を願っております。」

中曽根えり子さん（新潟県）は、当時7歳の息子さんをスピード超過の過積載トラックに轢かれて亡くされた。「今でも10年前のあの時に戻ってやり直せたらと思いますし、本当につくづく、自分や家族の人生が変わってしまったと感じています。」「同じ被害に遭った方ではなくても、被害に遭ったことをきちんと受け止めて、話をしたいときに対等に聞いてくれる人がいることが大事ではないかと思います。」

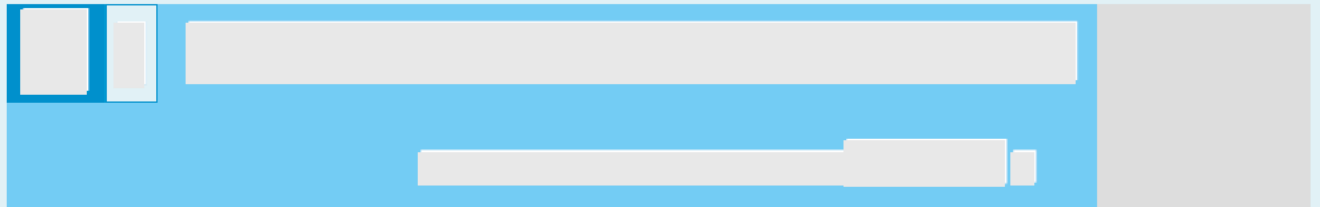
今井加壽子さん（大阪府）は、当時34歳のご長男が通りすがりの見ず知らずの加害者に殴られ、現在に至る後遺症（高次脳機能障害）に苦しんでいる。「事件に関する情報や手続きのことなど、早い時期に情報が入れればよかった。脳障害の場合、症状固定は半年から1年半なので、3年経った頃にどうすればよいかを考えなければな

らないのですが、相談に行く窓口すらわからず、色々な意味で回り道をしました。」

米村州弘さん（熊本県）は、当時20歳だった娘さんが絞殺され、2週間後に山中で発見された。「加害者の刑務所内での生活について、3段階の項目にチェックされただけの報告を受けていますが、生の言葉を聞きたいです。」「私たち被害者家族の気持ちを踏みつけるような報道の仕方はしてほしくない。そして、（報道に曖昧な情

報を与える）発表も警察にはしてほしくない。」

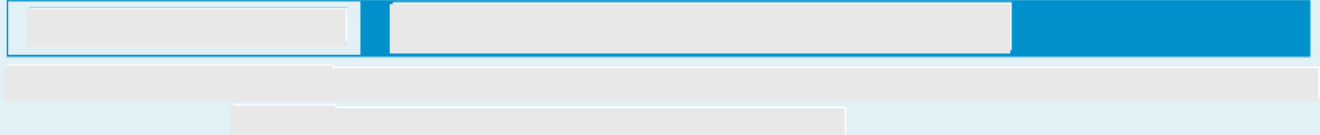
4人の発言の後、コーディネーターの大久保氏から、被害者を取り巻く厳しい現状を、仕事や役割があるから担当するのではなく、一人の人間として受け止めて、今後の支援に活かしていかなければならないと感じるとのコメントがあった。また井上氏は、民間団体としては、被害者の方の声を聞いて、関係機関や地域社会に働きかけ、伝えていくことが大切であると訴えた。



[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]



[Redacted text block]

[Redacted text block]